

## 審査の結果の要旨

氏名 北川 裕子

本研究は、10代の若者（中高生）の自殺予防に資するため、希死念慮やいじめを受けることが援助希求行動にどのように影響するかをまず検討し、さらにその結果を受けて、「精神的悩み」よりも若者に聞きやすく答え易いと考えられる「身体不調」が、希死念慮や自傷行為とどの程度関連しているかについて検討したものである。解析には公立中学・高校の生徒、約1万8千人を対象に、いじめの被害、精神的健康状態、身体症状、援助希求行動の有無等について自記式質問紙を用いて行った横断調査データを用いた。

最初の研究（2章）では、いじめ被害者では精神的悩みに対する援助希求行動が増加していること、希死念慮をもつ者は、それが不明確なレベルでは援助希求行動は増加しているが、明確なレベルではその増加が見られなくなることが示された。さらに、いじめ被害者の場合には希死念慮があると援助希求行動は少なく、特に希死念慮が明確な者では希死念慮のない者に比べてオッズ比で約3分の1と少ないことが示された。これらは自殺リスクが高まっても援助希求行動は増えないこと、特にリスクの高い者ほど援助希求が増えない可能性を示しており、重要な結果と考えられる。なおいじめ被害者や希死念慮を有する若者の援助希求行動については、結果は一致していないものの先行研究はあるが、両者の交互作用については世界初の検討である。またこの研究は、実際の自殺が10代後半で急増することを踏まえ、高校生（約9千人）を対象とした。

この結果を踏まえ、その後の研究では「身体症状」と希死念慮や自傷行為との関連性について検討した。これは将来的には、若者に訊ねやすく答え易い質問をもとにした自殺リスク評価指標を作成するための第一歩として行ったものである。なおこれらの研究では、精神不調が増加する10代を出来るだけ広く検討するため、中高生全体を対象として行った。この研究は、精神不調での出現頻度が高くうつ病の診断基準にも含まれる「食欲低下と不眠」（3章）、不定愁訴としても扱われやすい「だるさ、めまい、耳鳴り、肩こり」等の身体的訴え（4章）に分けて検討した。統計解析には、希死念慮（明確なもの）と自傷行為をそれぞれ目的変数に、年齢、性別、不安・抑うつ（GHQ-12で評価）を交絡として調整し、食欲低下、不眠（3章）、あるいはだるさ等8つの身体的訴え（4章）を説明変数として強制投入する多変量ロジスティック回帰を用いた。その結果3章では、不安・抑うつスコアを交絡として調整しても、食欲低下、不眠のどちらも希死念慮、自傷行為を有意に予測することが示された。4章では、希死念慮は耳鳴り、めまい、下痢により、自傷行為はこの3つと「だるさ」により、いずれも不安・抑うつスコアを調整しても有意に予測することが示された。各症状・愁訴の感度を考えるとさらに検討を進める必要性はあるが、本結果は、これらの症状・愁訴が自殺リスクの評価において有用な指標となり得ることを示しており、極めて重要である。なお、若者における自殺リスクと食欲との関連、個々の身体愁訴との関連の検討は世界的にも初めての試みである。

以上より、結果の重要性、独創性のいずれの点からも本論文は学術論文として一定水準以上に達したものと判断され、博士(教育学)の学位にふさわしい論文であると評価された。